

渡辺 実著

大鏡の人びと

行動する一族



中公新書

830



中公新書 830

渡 辺 実著
大鏡の人びと
行動する一族
中央公論社刊

渡辺 実 (わたなべ・みのる)

1926年(大正15年),京都市に生まれる。
1948年,京都大学文学部卒業。京都大学教
授を経て,現在,上智大学教授,京都大学名
誉教授。文学博士。専攻,国語学・国文学。
著書『国語構文論』(塙書房 1971年)
『伊勢物語』(新潮社 1976年)
『平安朝文章史』(東京大学出版会
1981年)

大鏡の人びと

中公新書 830

© 1987年

検印廃止

昭和62年2月15日印刷

昭和62年2月25日発行

著 者 渡 辺 実

発行者 嶋 中 鵬 二

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振替東京 2-34

定価 520円

ISBN4-12-100830-8

目次

序章 万寿二年のこと

第一節 物の怪の叫び

4

後の位 東宮の位 ねらわれる東宮位 東宮
退下の条件 失意から呪いへ 今ぞ胸あく

第二節 男の目

23

歴史物語 藤原北家 大宅世継 道長讃美
人物の器量

第一章 「みやび」のころ

第三節 風流貴族のなげき

40

承和の変 応天門の変 伊勢物語 貴族の
心 傷つかぬ心

第四節 天神の怒り 56

阿衡詮議 時平と道真 道真失脚

第五節 胸に打つ釘 69

忠平とその息たち 権力欲 護る霊 非道
と背信 百鬼夜行と夢違え

第二章 「もののあはれ」のころ(上)

第六節 後のねたみ 88

後宮の争い 嫉妬の種 教養の女性 権力の
女性 実在の母后 物語の母后

第七節 「あまがへる」 104

仮名ノフミ 骨肉の憎悪 兼家の不満 花
山院おろし 蜻蛉日記 理解し合えぬままに

第八節 帝王の「くるひ」 125

奇行の血 型破りの帝 標準規格外 「く
るひ」における純

第三章 「もののあはれ」のころ(下)

第九節 敗者の気位

142

兼家の息たち 中関白家の春 知性の明るさ
中関白家のつまずき 中関白家没落す 怨霊に
なれぬ者 ならぬ者

第一〇節 勝者の備わり

167

後宮制覇への布石 後宮制覇進む 後宮制覇
完了近し 後宮完全制覇成る 道長の人とな
り 道長と光源氏

終章 「こころたましひ」のころ

193

第一一節 別れの拍手

194

新しい生き方 新しい文章

大鏡の人びと

— 行動する一族

序章 万寿二年のこと

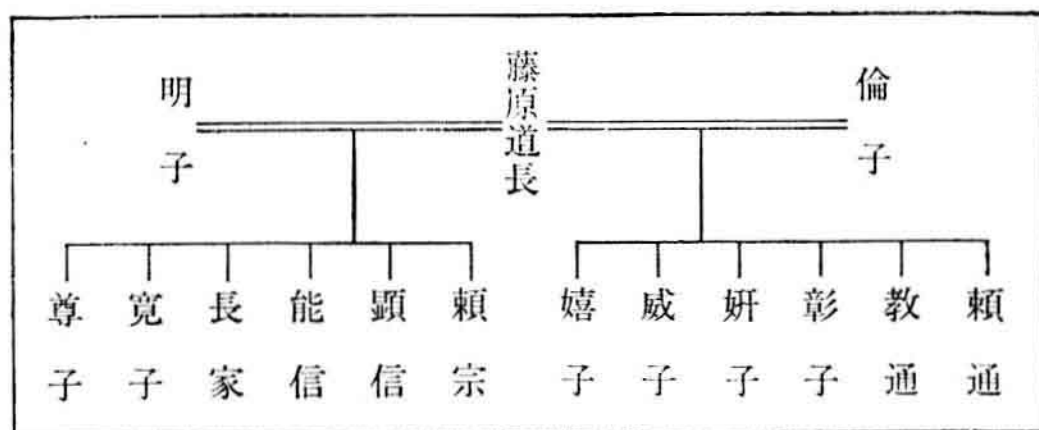
第一節 物の怪の叫び

後の位 東宮の位

万寿二年（一〇二五）、あれほど権力をほしいままにした藤原道長の周辺にも、不幸のきざしが漂い始めた。そのはじまりは、娘の寛子かんしの死である。寛子はこの時「小一条院の女御」と呼ばれる身であったが、この不幸な娘は、父の道長に政治的に利用されるために生まれて来たような女性であった。

道長には、二人の妻との間に六男六女があった。当時の貴族社会のことだから、道長の妻妾は他にもいたに違いないが、子をもうけて道長室としての地位を保ったのは、この二人である。一人は左大臣源雅信まさのぶの娘で倫子りんしと言い、他の一人は左大臣源高明たかあきらの娘で明子めいしと言った。道長の最初の子は倫子が産んだ。これが彰子しょうしで、長じて一条天皇の中宮となり、後一条、後朱雀ごすざく二帝の母として、道長の栄達を不動のものとした娘である。

摂関政治下における権力への道は、この道長と彰子との場合に典型的にあらわれているように、政治家が自分の娘を天皇の妃に配することを計り、それに成功するとその娘が天皇の男御子を産



昔の系図の示し方では、男子を年齢順にまず示し、次に女子を年齢順に示す。従って男の子と女の子との間の年齢順は示されない。調査によって順を明らかに出来る部分は少ないが、それでも完璧は期しがたい。だから本書も昔の系図の様式を襲う。時に図示の都合で、女子を男子より前に置くこともあるであろう。

むことを祈り、運よくそれが実現すると、わが孫にあたるその親王を東宮（皇太子）に立てるよ
うに策略を進め、それにも成功しやがて孫が帝位に即くと、今上（当代天皇）の外祖父として撰

政関白といった最高位を手に入れる、というコースを辿るのが常だったから、政治家の娘はすべて、父親の権力志向の道具に使われる運命の下に生まれて来るようなものである。道長の場合、倫子の産んだ次女の妍子も三条天皇の后となり、同母妹の威子も後一条天皇の后となって、そろって道長の栄達に貢献している。

天皇の妃は、娘を後宮に入れようとする政治家の増加にともなって、少なからぬ数にのぼる場合があるが、その中で「後の位」につく妃は一人に限られる。「后」は制度上のポストだからである。もっとも「後の位」には、皇后・皇太后・太皇太后の三つがあり、それを「三后」と称するが、今上の后は皇后一人しかないのが原則で、妃たちにとっては狭い門である。他に中宮（ちゅうぐう）というのがあるが、これは本来は皇后の別称である（後に独立して皇后と対等のも

のとなる。中宮を含めたこれら「後の位」は、女性として到達し得るこの世での最高の地位なのだが、道長の娘三人はそれぞれ後の位につき、同時代の良識派貴族を

一家立三后、未_ニ曾有_一（同じ家から三人の后が立つなど、前代未聞の出来事だ）

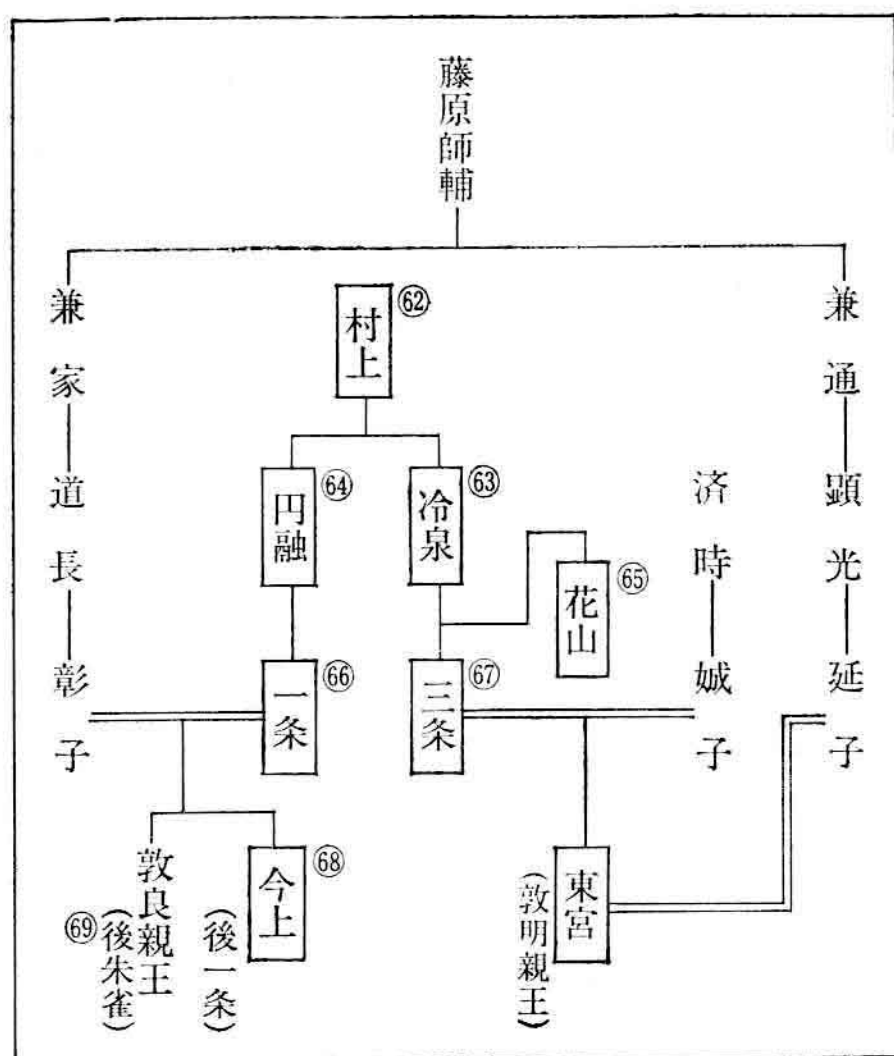
と驚嘆せしめたのであった。道長自身はそんな批評には無頓着で、威子立後の当夜

この世をばわが世とぞ思ふ望月の 欠けたることのなしと思へば

と自讃する有様だったが、彼の権力は、自分の娘たちを利用することで得られたものであった。

道長の満月が欠けはじめるのが、最初に述べた万寿二年の寛子の死であるが、道長の寛子の利用の仕方は、彰子たち三人の利用の仕方とはいささか趣が変っていた。彰子たちも道長にとって権力への道具であったとはいうものの、彼女たちは後の位を極めたのであり、それはいわば父の力のおかげでもあった。利用はされたが報われもしたと言えよう。だが寛子の場合、利用されるだけなのであった。彰子たち三人の母が倫子であるのに対して、寛子の母は明子で、いわゆる腹違いにあたる。そこに一種の差別があったのかどうか、その所はわからない。恐らくは適齢期を迎えた時の周囲の状況の違い、娘の将来に対する親の配慮の違い、つまりは本人の生まれした運命・星の違い、と言うべきなのであろう。

寛子が死ぬ八年前、寛仁元年（一〇一七）に、時の東宮が自ら次期帝位継承者たるその地位を退く、という奇妙な事件が起こった。東宮が政争にまきこまれて廃太子の憂き目にあうことは、



さほど珍しいことではないが、自発的に退下するのは前代未聞の出来事である。その時の今上は、彰子の産んだ後一条天皇で、長和五年（一〇一六）正月、三条天皇の譲位で帝位に即き、東宮には先帝三条院の第一皇子たる敦明親王が立てられていた。あつあきら敦明親王には、いち早く藤原顯光（長和五年現在右大臣、なお当時の左大臣は道長）が、その娘の延子えんしを妃に配して将来にそなえていた。

やがて敦明親王が帝位に即くことは約束されているのだから、延子が男御子を産めばそれが東宮に立って帝位を継いで……という例の計算である。延子が後の位につくことも、可能性の低くない夢であり、顯光自身が帝の外祖父として摂政関白の位について、年下でありながら常に自分より上席にいる従弟の道長を見返すことも、あり得ぬことでもないのであった。

ところが当の東宮が、次代の帝位に即くことに厭気を抱き始めた。天皇の位に即けば、立场上自由な行動が許されなくなるだろう、

それよりは帝位に即く権力を放棄して、気楽な暮しを楽しむ方がよい、というのが、母后（せいらし）にもらした表向きの理由であったが、実情は道長から陰に陽にかかって来る圧力を感じての決断であつたらしい。東宮妃延子の父顕光の夢みる可能性は、裏を返せばそのまま道長にとっての危険性である。道長はすでに孫にあたる今上（後一条）を擁し、幼帝の外祖父として権力の座にいたけれども、次の帝位に敦明親王が即く時には、政権は顕光の側に移って再び道長一族のところへは戻って来ないかも知れない。そんなことはさせないつもりだが、道長としては、東宮敦明親王との間にどのような関わりを結ぶか、それが最大の問題であつた。

あり得る線の結び方、それは誰の目から見ても二つに一つであつた。まず道長が自分の娘の一人を東宮妃として敦明親王に配すること。すでに顕光の娘の延子が妃として存在することは、条件として悪く作用するけれども、それは押しの強さで乗り切ればよく、そのあとは男御子の誕生を祈る、という道である。もう一つの道、それはずっと困難なことではあるが、東宮を廃太子に追い込むこと。この二つは、壻（ムコ）とは本来、自分の娘の配偶者を、親の立場から指す言葉である）として東宮位を支える味方に立つか、逆に東宮位を奪おうとする敵にまわるか、正反対の道であつて、二者択一のはずである。ところが不思議なことに、この互いに矛盾する両方の噂が、共に世間に流れはじめた。

ねらわれる東宮位

すでに東宮の所へ御機嫌うかがいに来る者は、次第に少なくなつて来ている。東宮の父三条院の御在世中はその第一皇子として、そして長和元年（一〇二二）からは東宮として、追従する者も多かったが、寛仁元年（一〇一七）五月に三条院が崩ぜられてからは、人びとの足は早くもこの東宮から遠ざかり始めたのである。道長が権力を握ったからは、その政治運営一つで、恐らくこの東宮が即位されても短期の帝王に終るであろう、と判断されたからに違いない。

事実、時たま東宮を訪れる者は、世間の噂ですが、と前置きして、きまつて次のようなことを口にするようになった。

今上（後一条）の弟宮、敦良親王さまの将来について、母君たる皇太后（彰子）さまも祖父にあたる道長公も、非常に心配していらっしゃいます。将来、今上に男御子でもお生まれになるようなことになれば、その御子がやがて東宮に立たれて、敦良親王さまは帝位から遠ざかつてしまわれる、といったことにもなりかねまい。そんな事態にならぬ先に、敦良親王さまを東宮に立てるすべはないものか、とお考えのようです。とすればあなた様から東宮位を無理やり奪い取る、といった強硬手段に出ないとも限りません。道長公のことですから十分にあり得ることです。御注意が必要でしょう。

敦良親王は後一条天皇と一歳しか違わない。彰子のいわゆる年子であつて、このままだと後一条

天皇からの讓位で敦明親王が即位される時に、替って東宮の位に立つ道、つまり次の次の帝位を待つ道しかない。それでは祖父としては待ち切れない思いだろうとは、敦明親王にも察しがつくことであつた。そのようなことを氣にもとめず、対決姿勢で通すことも理論的に可能だが、敦明親王の耳に入つて来るもう一つの噂は、これとは全く異質な取沙汰であつた。それは

道長公は、明子腹の寛子さまを、東宮に興入れさせたい、とお考えのようだ。実現すれば壻として、きっと大切に華やかにもてなされるに違いない。

というのであつた。

先にもふれた通り、この二つの噂は互いに矛盾する性質を持っている。世間の噂はいつの時代でも無責任なもので、あり得そうな線が想像されて世間の口に乗ると、だんだん本当らしさを濃くしながら噂として流れて行き、結果として、矛盾するような取沙汰が、どちらも真実めいて語られることになつても不思議ではない、今の場合もそれにすぎない、という見方も可能であらうが、恐らくこの場合は、道長が噂を流させたのであらう。本人の口からは責任ある言葉をはかず、周囲の者を使って噂を流させ、それが世論となつて熟するのを待つ、というのが、良く言えば老練な、悪く言えば狡猾な政治家が好む手段であることは、古今東西を問わないのではあるまいか。今の場合、それが東宮位強奪と娘への壻どりとの、硬軟両様・和戦両様の噂であるのは、恐らく道長が東宮にしかけたゆさぶりであつたに違ひなかつた。

このゆさぶりに対して、東宮はみごとな対応をもってした。もともと皇族は、藤原一族のごとき辣腕政治家の手管の前に弱いものである。平安初頭以来、藤原氏の政治力に利用せられ、あるいはその犠牲となつて、無念の思いを余儀なくされた皇族は少なくない。だがこの東宮の場合は少し様子が違っていた。

東宮の考えは恐らくこうであつた。——いずれ帝位に即いても道長に圧迫されるにきまつており、早々と讓位をせまられることになるのであらう。それどころか、下手をすると噂の通り、理屈をつけて廃太子の憂き目を見させられるかも知からない。理由など、道長の先祖たちがやつて来たのを見てもわかる通り、どうにでもこじつけることが出来るものだ。そんな屈辱を受けるよりは、自発的に東宮位を退こう。そうすれば、道長に交換条件をつきつけることも出来る——つまり、自分から退下を申し出ることで、事態のイニシアティブをとろう、というのである。しかも敦明親王が東宮位とさし替えに考えた交換条件とは、もう一つの噂、道長の娘寛子を妃に迎えること、などという小さな要求にとどまるものではなかつた。

東宮は道長の息の能信よしのぶに使いを出した。ちょっと来てはいただけまいか、というのである。能信は寛子と同腹の兄、当時は左近衛権中将であり、四条坊門に住んでいて西洞院の東宮邸に近かつたので呼ばれたらしいのだが、平素訪ねたこともない東宮からの招きに、当然思い当る所があつた。噂はかねて流してある。その筋であることは間違いない。能信は東宮邸にうかがうに先立